

学位研究 第15号 平成13年11月 (論文)

[大学評価・学位授与機構 研究紀要]

ライン川上流域ヨーロッパ大学連合 (EUCOR)  
—沿革・教育成果の相互認定・学位—

European University Confederation of the Ober Rhine :  
Its Development, Mutual Learning Evaluation and Degrees

大嶋 誠

OSHIMA Makoto

*Research in Academic Degrees*, No. 15 (November, 2001) [the article]

The Journal on Academic Degrees of National Institution for Academic Degrees

はじめに .....	5
I. ライン川上流域ヨーロッパ大学連合の創設とその目的 .....	5
1 創設への道のりと目的 .....	5
2 「大学連合」創設の地理的条件と歴史的背景 .....	7
3 「大学連合」加盟校の現勢 .....	9
II. ライン川上流域ヨーロッパ大学連合の活動 .....	10
1 一般的活動 .....	10
2 学生交流と単位認定 .....	10
(1) 修学上の便宜 .....	10
(2) 学習成果の相互認定 .....	12
(3) 「大学連合」加盟校間の学生交流 .....	14
III. ストラスブール高等バイオエレクトロニクス専門学校 .....	14
1 設立の経緯と目的 .....	15
2 教育上の協力体制 .....	15
3 受験資格・選抜方法・学生定員 .....	16
(1) 受験資格 .....	16
(2) 選抜方法 .....	16
(3) 入学定員 .....	17
4 教育内容、試験など .....	17
5 試験、取得学位（免状） .....	18
6 学生の進路 .....	19
むすび .....	20
ABSTRACT .....	23

# ライン上流域ヨーロッパ大学連合 (EUCOR)

## —沿革・教育成果の相互認定・学位—

大嶋 誠\*

### はじめに

本稿は、ライン川上流域に位置する3ヶ国7大学、すなわちフランスの4大学—ストラスブール所在のレイ・パストゥール大学 (Université Louis Pasteur de Strasbourg)、人文科学大学 (Université des Sciences Humaines de Strasbourg)、ロベール・シューマン大学 (Université Robert Schuman de Strasbourg) およびミュールーズとコルマル所在のオート・アルザス大学 (Université de Haute-Alsace de Mulhouse-Colmar)—、ドイツの2大学—カールスルーエ、フリデリチアナ大学 (Universität Fridericiana Karlsruhe) とフライブルク、アルベルト・ルドゥヴィクス大学 (Albert-Ludwigs Universität Freiburg im Breisgau)—、スイスの1大学—バーゼル大学 (Basel Universität)—が、国境を越えて構成する大学連合を対象として、その沿革を考慮し、7大学間の学生交流を手がかりとして、大学間における「相互的単位認定」の在り方を検討するものである。

また併せて、フランス、ドイツ、スイスの3カ国に属する関係者がカリキュラム編成と教育に関与し、そこでの教育成果が3カ国の国家認定学位の交付として結実するストラスブール・バイオテクノロジー高等専門学校の教育体制、教育組織を明らかにしたい。

## I ライン川上流域ヨーロッパ大学連合の創設とその目的

### 1 創設への道のりと目的

ライン上流域ヨーロッパ大学連合 (Confédération Européenne des Universités du Rhin Supérieur/Europäische Konfederation der Oberrheinischen Universitäten, 略称 EUCOR) への第一歩は、1977年に遡る。その年、バーゼル大学事務局がライン川上流地域の大学長に対して、国境を越えた教育の実施を提案した。

1983年、ヨーロッパ評議会の組織する円卓会議がストラスブールで開催され、ライン上流地域の高等教育の将来が議論された。そこでは、当該地域での大学間協力が十分に進展し、ヨーロッパの他の国境を越えた地域のモデルと貢献する、との決意が表明された。

翌1984年、ストラスブール大学区長・ストラスブール大学シャンスリエであったピエール・デイヨンの提唱に応じて、カールスルーエ、フライブルク、バーゼル、ストラスブール、ミュールーズ所在の7大学の長が、「ライン上流域大学長協議会」 (Conférence des Recteurs et

---

\* 大分大学教育福祉科学部 教授

Présidents des Universités du Rhin Supérieur)を結成し、大学間の協力関係に努めるべく結集した。

この「学長協議会」が取り上げた主要な目標は①文化交流と隣国の言語の習得を推進すること②教員および学生の交流—学生交流の最終目標は、各学生が在学中に1セメスターは「外国」の大学で学ぶこと—を推進すること③ヨーロッパに関連する広範な計画を地域レベルで考える、というものである。

この目標を実現するための具体的な活動が翌1985年から見られた。その年、フライブルク大学がライン川上流域大学間の第一回目のシンポジウム「大学と地域」を開催した。そのシンポジウムでバーデン・ヴュルテンベルク州のロタル・スペートは、学問研究と技術移転の推進を目的とする国境を越えた共同体というコンセプトを主張した。また、1986年には、「学長協議会」が主催する最初の研究集会在ストラスブールで開催され、ライン川上流域の環境問題がそこでは取り上げられた。

こうした一連の動きを踏まえて、1989年10月19日、「ライン川上流域大学連合学長協議会」は「ライン川上流域ヨーロッパ大学連合」を構成する協定を結んだのである。

「ライン川上流域ヨーロッパ大学連合」の目標は、前文と12条の規定から成るその協定の前文において明言されている。前文は、この協定が上述の1984年の「学長協議会」の合意事項である国境を越えた研究・教育協力を深化させるため、協力に必要なより拘束力のある基盤を与えることを共通の願いとし、またヨーロッパの国家間、地域間の相互接近に建設的に貢献することを希望して、協定を結ぶとしている。

協定の前文は、さらに、上述の1984年の「学長協議会」合意事項である国境を越えた研究・教育協力を教員・学生の交流と共同研究の実施を通して深化させること、そして、ヨーロッパの国家間、地域間の相互接近に建設的に貢献することを謳っている。

ここから理解されるとおり、「ライン川上流域ヨーロッパ大学連合」は、1984年の合意事項を再確認し、それを実践する意思を表明することによって、その合意事項が目指す国境を越えた文化交流、教員・研究者および学生の交流の促進と研究・教育領域での協力、さらには地域問題の共同的解決を通して、地域ひいては国家間の接近を図ることを目差したのである。

「ライン川上流域ヨーロッパ大学連合」の目標の背景に位置する理念は、いうまでもなく、ヨーロッパ統合の理念である。7大学大学間協力に始まり「大学連合」結成へと至る1980年代は、ヨーロッパ共同体（EC）加盟国がヨーロッパ統合—とくにここでは「市場統合」—に向けて結束し、その実現を目指して大きく前進した時期に符合する。すなわち、1985年には「EC域内市場統合白書」が採択され、「単一ヨーロッパ議定書」の合意がされた（加盟国による調印は1986年、批准は1987年）。また、単一市場の利点を数量化した「チェッキーニ報告書」が提出されたのは1988年である。さらに、ヨーロッパ統合プログラムの一環として、学生交流の推進を図る「エラスムス計画」が実施に移されたのも、1988年からである。高等教育・研究面でのヨーロッパ統合運動として「ライン川上流域大学連合」は位置づけられ得るのであり、それゆえに、「大学連合」に「ヨーロッパ」という形容辞が付されていると理解される。

## 2 「大学連合」創設の地理的条件と歴史的背景

ところで、「ライン川上流域ヨーロッパ大学連合」の創立にあたっては、連合加盟大学が位置する地理的条件が有利に働いた。

地理的条件に関して言えば、上述の7大学は、ライン上流域、すなわち、シュヴァルトヴァルト、ジュラ山脈、ヴォージュ山脈に囲まれた地域に位置し、同じ気象条件を共有している。また、ライン川は交通と物流の大動脈であるが、その兩岸の間の、国境を越えた人と物の交流を古くから可能にしてきた。言語上の違いはあるにせよ、人文地理上の同質性を共有しているのである。この地域に置かれた先述の7大学の距離は近く、相互の交流を阻害する要素とはならず、当然のことながら、大学間の交流を容易にする条件を提供する。例えば、フライブルクを中心に考えた場合、ミュールーズへは80分（バス）、バーゼルへは35分（鉄道）、カールスルーエへは60分（鉄道）、ストラスブールまでは70分（鉄道）の距離なのである。

一般的に言えば、ライン川上流域に位置する大学間の学生交流は中世末期以来、地理的条件に加えて、共通語としてラテン語が機能していたこともあって、きわめて活発であった。しかし、ナポレオン治世期以後、学生が近接する大学で学ぶという習慣は廃れていった。一方では、ライン川上流域がフランス・ドイツ間の政治的緊張関係の震源地となり、他方では近代国民国家の確立に伴って国語が確立されたことによる政治的、言語的障壁が学生の前に大きく立ちただかるようになったからである。

しかしながら、前述の通り、第二次世界大戦後の政治的、経済的潮流、「ヨーロッパ統合」に向けての動きの中で、学術・教育の領域での国境を越えた協力関係を妨げる障壁を取り除く方向が鮮明に打ち出されたのである。

次に、「大学連合」を構成する各大学の歴史の概略をたどっておこう。

ライン川上流域の大学の歴史は中世末期、1457年にフライブルク大学が創設されたことに始まる。ローマ教皇、神聖ローマ皇帝の両者から創立特許状（*lettres patentes*）を得たこの大学は、アールベルクからヴォージュ山脈南部に広がるハプスブルク領の聖職者とエリートを養成する目的をもって設置された。

創立期から宗教改革期にかけて、フライブルク大学では「ライン上流域のサヴォナローラ」と称される神学者・説教者ガイラー・フォン・カイザースベルク（1445-1510）、さらにはロッテルダムのエラスム（1469-1536）が活躍し、フライブルク大学はライン・ユマニズムの中心地となった。

1530年以降、フライブルク大学はカトリシズムと対抗宗教改革の拠点として大学の生き残りをかけて闘った。1620年、神聖ローマ皇帝は大学をイエズス会に委ねた（1773年まで）が、30年戦争ではスウェーデン軍がフライブルクを占領し、大学は衰退した。17世紀、フランス王ルイ14世の時代、フライブルクはフランス領となったため、教師団が集団で流出し、「フランス学院」（*Studium Gallicum*）が設置された（1698年まで）。

1805年フライブルクはバーデン大公の支配するところとなった。この時期、フライブルク大学はハイデルベルク大学の名声と競うことになり、大学は「宗派性」（新教的大学であること）

を捨てる決断をした。19世紀初頭以降、フライブルク大学は時代の思潮の動きに参画しつづけている。

フライブルク大学の創設とほぼ同時期、1460年、バーゼル市民の発意に基づいて、ローマ教皇ピウス2世が創立特許状を与えたことによってバーゼル大学が誕生した—これら二大学はいずれも神学部、法学部、医学部、教養部（哲学および古典語研究）の四学部から成っていた。

バーゼル大学は、その長い歴史において、二度消滅の危機に直面した。最初は、16世紀初頭、宗教改革期に、二度目は1833年、バーゼル州（canton）が分割されたときである。その危機を乗り越えて、スイスを代表する大学として名声を博している。その名声は創立以来、文化系、理科系の領域で優れた人材がバーゼル大学で活動したことに起因する。例えば、16世紀には哲学者ロッテルダムのエラスムスが、次の世紀には数学者ジャック・ベルヌイ（1654-1705）、ジャン・ベルヌイ（1667-17485）が活躍し、19世紀、20世紀には美術史家ヤコブ・ブルックハルト（1818-1897）、哲学者カール・ヤスパース（1883-1969）、神学者バルト（1886-1968）、そして動物学者アドルフ・ポルトマン（1897-1982）らがバーゼル大学との関わりにおいて記憶に留められる。

ストラスブールに高等教育機関が設置されたのは16世紀前半である。人文主義者であり神学者であったジャン・スチュルム（1507-1589）と都市当局とが1538年、プロテスタント系高等学院を設置した—そこではバリを追われたジャン・カルヴァンも教鞭をとった—のである。この教育機関は、宗教改革の落とし子であった。そしてこの学院は、皇帝フェルディナント2世から創立特許状を得て大学となった（1621年）。

しかし、ストラスブール大学はその後、カトリックとプロテスタントとの宗派的対立、フランスとドイツとの政治的抗争に翻弄される歴史を体験することになる。

1618年、ストラスブール司教はプロテスタント系学院に対抗すべくモルスハイムにカトリック神学・哲学学院を創立した。ストラスブールがフランス王領に編入されると、国王ルイ14世はこの学院を市内に移転させ、地域のカトリック系エリート養成の教育機関とすべく、イエズス会にその運営を委ねた。こうして、ストラスブールには、新旧両派の大学が並立し、その名声を競い合うことになった。

フランス革命により二つの大学は廃止され（1792年／1793年）、ナポレオンはプロテスタント神学、法学、医学、文学、数学・物理学の5学部から成る一つの大学を創設した（1808年）。

普仏戦争後、ストラスブールは「ドイツ帝国領」アルザス・ロレーヌの首邑となり、その地の大学は従前の5学部にかトリック神学部を加えた6学構成の大学に再編され、フランスに対するドイツ学術の「ショーウインドウ」の役割を演じる「帝国大学」となったが、1919年、ストラスブール大学は再びフランスの大学となった。

第二次世界大戦期のナチ・ドイツによる占領が終戦とともに終結し、ストラスブール大学は、活動を再開し、1968年の大学改革により、上述の3大学に再編された。

カールスルーエ大学とミュールーズ大学の設立は、これまでに述べた三大学のそれに比べるとはるかに遅い。

カールスルーエに高等教育機関が誕生するのは、産業革命の進行を受けてのことであった。バーデン大公はパリのエコール・ポリテクニク（Ecole Polytechnique）にならって、理工科大学（Polytechnikum）を設置した。

オート・アルザス大学の創立はさらに遅れて1975年になってからである。だが、その出発点となったのは、ミュールーズで19世紀に始まった工科系高等教育に求められる。すなわち、ミュールーズの工業界の主導の下にいくつかの工科系の専門学校が設立された。1822年に設立された化学技師養成専門学校、1861年に創設された繊維工業専門学校がその例である。そして、アシル・プノ（1801-1886）、ポール・シュッツエンベルガー（1830-1897）、とりわけエミリオ・ネルティン（1851-1922）が教鞭をとることによって、ことに染色の領域において、化学技師養成学校の名声は国際的なものになった。

1958年、新たな実務系高等教育機関である技術短期大学部（Institut Unversitaire de Technologie）が設置され、1977年には、それらの教育機関と化学技師養成学校が発展した国立工業高等化学専門学校（Ecole Nationale Supérieure des Industries-Chimie）、繊維工業専門学校が発展した国立工業高等繊維専門学校（Ecole Nationale Supérieure des Industries-Textile）とが中心となってオート・アルザス大学が生まれたのである。

### 3 「大学連合」加盟校の現勢

次に、連合7大学の学部構成、教員・学生数など、現勢についての概略を記すことにしたい。

ストラスブール所在の3大学から始めよう。まずルイ・パストゥール大学の学生数は約16,500人（1999年／2000年学期）、教員数は約1,300人を数える。人文科学大学の学生数は約13,000人（上記に同じ）、教員はおよそ450人。ロベール・シューマン大学の学生数は約8,500人（上記に同じ）、教員はおよそ350人である。オート・アルザス大学では、7324人の学生が在籍し、447人の教員が教鞭をとっている（1999年2月）。ドイツのフライブルク大学は約23,500人の学生（1999年／2000年学期）と約3,000人の教員を擁しており、カールスルーエ大学には14,500人ほどの学生が学び、約1,300人の教員（非常勤教員を含む。国家雇用の常勤教員は約260名）が活動している。そして、スイスのバーゼル大学の学生数はおよそ6,800人、教員数は約1,300人である。

これら7大学はそれぞれ次のような教育研究組織から成っている。ロベール・シューマン大学は11の研究組織（社会科学系の法学、政治学、管理学部、企業経営研究所、ヨーロッパ高等研究所、ジャーナリズム教育大学センターなど）から構成されている。ルイ・パストゥール大学は医学系、理学系、人文社会系17教育研究組織（医学部、口腔外科学部、薬学部、生命科学部、心理・教育学部、経済・経営学部、国立化学高等専門学校など）から成っている。オート・アルザス大学を構成するのは、文学・人文科学部、経済学・社会学・法学部、国立高等化学専門学校など3国立高等専門学校をはじめとする13の研究組織である。フライブルク大学は神学部、哲学部、法学部、経済学部、数学部、物理学部、地質学部、化学・薬学部、医学部、森林学部など15学部から構成されている。カールスルーエ大学は数学、物理学、化学、生

物地理科学，人文社会科学，建築学，土木工学，機械工学，化学・プロセス工学，電気・情報工学，情報科学，経済学・産業工学の12学科，12の学際的研究所・センター，9の高度研究所を擁している。また，パーゼル大学は神学部，法学部，医学部，精神科学部（哲学第1学部。歴史学，古典文献学，考古学，情報科学など），経済学部，自然科学部（哲学第2学部。生物学，数学，物理学など）の6学部もっている。

これまで述べた地理的近接性と歴史的背景に加えて，こうした教育研究領域をカバーする3カ国にまたがる7大学は，「大学連合」として結集し，各大学の持つ人的，物的資源，研究教育力を国境を越えて有効に活用しようとしたのである。

## II ライン川上流域ヨーロッパ大学連合の活動

### 1 一般的活動

1989年の「ライン川上流域大学連合学長協議会」協定は，「大学連合」の目的を実現するための活動を網領的に示している。協定の第1条は，「ライン川上流域ヨーロッパ大学連合」の名の下に7大学が結集する目的が大学連合間の教育研究領域での協力をいっそう効果的な方法で，助成，推進することにあると記し，その具体的方策として，[個々の大学の]知識および獲得された経験の相互利用，教員，研究者，学生および事務職員，技術職員の交流，[個々の大学において]実施された教育に対応する学習成果の相互認定，共通の教育課程の設置，共同研究室の設置，共通の計画にもとづく学術研究の実践，研究用共通のデータ・ベースの作成およびデータ・ベース網の設置，大学間生涯学習プログラムの編成などを挙げている。

ライン川上流域ヨーロッパ大学連合の紹介冊子は，教育研究面の活動として，ライン川上流域大学の参加による，ストラスブル・バイオテクノロジー高等専門学校でのバイオテクノロジーの共同教育の実施（後述），医学博士課程における共通教育の実施，アンドロロジーのヨーロッパ共通証明書の発行，多臓器移植と消化器外科の専門講義の実施，フランス，スイス，ドイツの研究者によるライン川地溝帯の気候に関する共同研究の推進などを挙げている。

こうした活動を踏まえた上で，本稿の関心からすれば，学生交流を利用して，「大学連合」加盟大学に在籍する学生が，在籍する大学以外の「大学連合」で勉強した成果がどのように認定されるのかが問われなくてはならない。

### 2 学生交流と単位認定

学生交流はすでに述べたように，「大学連合」設立の目標の一つである。加盟大学間の学生交流を推進し，交流を容易にするために具体的に次のような方策が各加盟大学で採られている。

#### (1) 修学上の便宜

学生の移動・交流が活発に行われるための要因の一つとして，他大学での修学上の便宜が保証されることが挙げられよう。「ライン川上流域ヨーロッパ大学連合」が学生の移動・交流を推進するために採用した方策は，1989年の「ライン川上流域ヨーロッパ大学連合学長協議会」協

定第8条において示されている。その内容は次の通りである。

「連合加盟大学の学生が他の加盟大学の特定の講義ないしゼミナールに参加する場合、正規の教育課程のプログラムの枠内の科目を履修するために〔他大学に〕滞在する場合、当該学生は登録した大学に在籍しつづけるものであり、受け入れ大学に登録料を支払う必要はなく、この種の学生交流を助成するため、ライン上流域大学連合共通学生証が発行され、当該学生証の所持者は、ライン上流域の他大学において、そこに正規に登録した学生と同じ権利と特恵を享受できる。

大学連合を構成する各大学は、自大学の学生が他の大学に勉学のため滞するさい、これらの社会保障が他大学でも同様に有効であるよう、必要な措置をとり、また、各大学は他のライン上流域大学の学生に対して、公的生活において、自大学の学生が享受しているのと同じ特恵を手に入れるよう努力する」。

学生に修学上の便宜を可視的に保証するのは「ライン川上流域ヨーロッパ大学連合共通学生証」(EUCOR Studierendenausweis/ Carte d'étudiant) である。「共通学生証」所持者は、上述の協定第8条が保証する特恵に浴することができる。つまり、在籍する大学以外の他の「大学連合」加盟校で行われる教育—それには一定の制限が設けられているが—を無償で享受することができる。そして、当然のことながら、図書館や大学食堂を利用ことができ、受け入れ大学の学生が手にすることができるのと同じサービスを受けることができるのである。

学生が享受する修学上の便宜に関していえば、その内容は、ライン川上流域7大学長が1987年10月2日に締結した協定においてすでに合意に達していた。すなわち「ライン川上流域ヨーロッパ大学連合」の発足に先立って、学生の交流を推進するための具体的な方策が取られていたのである(協定 I, II, IV 条)。

1989年に生まれた「ライン川上流域ヨーロッパ大学連合」は、その意味では、それらの方策をそのまま受け継いだとすることができる。

学生の修学上の便宜に関わって次の点も指摘しておこう。「大学連合」を構成することで、7大学がその専門性を生かして、自大学の専門性を補完することができることになり、学生は補完的教育、より広範な分野の教育、学際的教育を享受する可能性が生じる。次表は、加盟大学で学修できる専門分野の一覧である。

	ULP	USH	URS	UHA	FU	KU	BU
神 学		○			○		○
法 学			○		○		○
医学・薬学	○				○		○
経済・経営	○		○	○	○	○	○
人文社会	○	○	○	○	○	○	○
物理・化学	○			○	○	○	○
数学・情報	○			○	○	○	○
工 学	○		○	○	○	○	
建 築						○	
芸 術		○					
体 育		○			○	○	○

(出典：EUCOR, En bref)

○は学修可能専門領域

ULP：ルイ・バトゥール大学      USH：人文社会大学

URS：ロベール・シューマン大学      UHA：オート・アルザス大学

FU：フライブルク大学      KU：カールスルーエ大学      BU：バーゼル大学

## (2) 学習成果の相互認定

「大学連合」間での学生の移動ないし交流を推進するにあたって、加盟大学が相互に他大学での教育・勉学成果を認定し、学位取得に必要な要件として算入しうるか否か—学位取得に必要な期間を延長することなく他大学で勉学することができるか—が重要である。

前述した1987年10月のライン川上流域の7大学長間協定は、すでにこの点に着目し、協定の第3条において、ライン川上流域の各大学は、学生が他大学で認定された学生の勉学成果を最大限認定すること、受け入れ大学の教員はしかるべき証明書を発行すべきことを定めた。そして、この規定は1989年の「ライン川上流域大学連合学長協議会」協定第9条に受け継がれているのである。

しかしながら、異なる教育制度を有する3カ国にまたがる大学連合間での学習成果の相互認定を実現させるには、乗り越えるべき障害が存在する。一つは、加盟大学での学習成果の認定の原則の確立である。これに関して、1995年12月ミュールーズで開催された「大学連合」委員会に集まった7大学の学長は、学生を受け入れた大学の教育、試験に関する規則に基く学習成果の認定を当該学生が在籍する大学は承認することに合意した。また、「加盟大学」で発行される科目ごとの成績認定証（Certificat/Scheine/Zertifikate）は学生が在籍する大学において承認されねばならないとすることに合意した。

学習成果の相互認定・承認にさいしては、大学間の成績評価が整合性をもたねばならない。この点に関して言えば、「大学連合」間では次のような措置を取ることによって成績評価を整合

させている。

フランスの高等教育における成績評価方式では、20点満点の20～18点が「秀」であり、これとスイスの6.0、ドイツの1+を同等とし、以下同様に17～16点「優」はスイスの5.5、ドイツの1.0と、15～14点（良）はスイスの5.0、ドイツの2.0と評価される。さらに13～12点（やや良）はスイスの4.5、ドイツの3.0、11～10点（可）はスイスの4.0、ドイツの4.0、そして9点以下（不可）はスイスの3.5以下、ドイツの4.5以上と認定される。

「大学連合」加盟校が学習成果の相互認定を行うさいの一つ前提は、各国の高等教育（大学）制度を構成する教育段階の「同等性」、ないし教育段階の修了を意味する「学位」あるいは「免状」の「同等性」を相互に承認することである。

これに関して、「大学連合」加盟校は各国政府間の協定に則って対応している。例えば、フランスの大学制度における修学期間2年の大学教育第1期課程はドイツの基礎学修課程（Grundstudium）と同等であり、第1期課程修了学位である「大学一般教育修了学位」（Diplôme d'Etudes Universitaires Générales）は、ドイツの大学の間試験（Zwischenprüfung）－その合格が専門学修課程（Hauptstudium）へ進む条件である－ないし「フォアディプローム」（Vordiplom）と、スイスの大学のVordiplom、4学期間の基礎学修課程（試験なし）（viersemestriges Grundstudium (ohne Prüfung)）と同価値である。フランスの大学教育第2期課程はドイツの専門学修課程と同等であり、第2期課程修了学位である「メトリーズ」－修学1年で取得可能な「リサンス」さらに1年の修学を重ねることで取得可能な「メトリーズ」から成る－は、ドイツの「ディプローム学位」（Diplom）、「マギステール学位」（Magister）、「国家試験」（Staatsexamen）と、そしてスイスの「リツェンティアト学位」（Lizentiat）、「ディプローム学位」（Diplom）、「国家試験」（Staatsexamen）と同価値である。

大学連合加盟校での勉学とそこでの学習成果の相互認定に関して、「大学連合」は共通の書式をもつ証明書を発行している。

この証明書は、①学生の「大学連合」加盟校の開講科目（セミナー、実習を含む）への登録、②当該科目への「定期的な」出席、③勉学成果の評価（成績）、④当該評価の学生の在籍大学での認定の4項目を証明する文書である。

①の項目には、受講希望学生氏名、当該学生の在籍大学、受講学期がまず記載される。ついで、科目担当者が当該学期の講義予定回数とともに受講希望の受け入れに同意する旨の文言が記されている。最後に日付と科目担当者の署名が付せられる。②の項目では、学生が「定期的」に①に記載した講義に参加したことが、科目責任者の署名をもって、日付とともに証明される。③では、学生が試験に出席し、取得した成績が科目責任者の署名をもって、日付とともに証明される。④では、学生在籍大学の責任部局（学部、学科、研究所）が、当該学生の取得した成績を認定する。そこには、大学名、責任部局名、部局の責任者名と署名、日付が記載され、責任部局の公印が押される。

この「大学連合証明書」はA4判、一葉のもので、片面はフランス語で、他の片面はドイツ

語で記載されるようになってきている。また、証明書の「正統性」を証明するための認印として、学生受け入れ大学の責任部局（学部、学科など）の公印が使用されることになっている。

### (3) 「大学連合」加盟校間の学生交流

これまで考察したように、「大学連合」加盟校は、学生の交流を推進すべく、さまざまな努力を重ねてきている。

「大学連合」が推進する学生交流を利用した学生数を若干古い数字であるが、挙げよう。1995年には、バーゼル大学の学生約50人、フライブルク大学の学生約30人、カールスルエ大学の学生約20人が、ミュールーズ大学の学生約10人が「大学連合」間学生交流を利用した。1996年／97年学期には、バーゼル大学の学生約180人、フライブルク大学の学生約30人、カールスルエ大学の学生41人が、連合に加盟する他大学が提供する教育を享受しており、この数字は前年度とほとんど変化がみられない。この数字からすれば、少なくとも1995年から1997年では、大学連合間の教育交流に与る学生は増加している（特にバーゼル大学の学生）が、多数であるとはいえない。

こうした数字は別として、「大学連合」が推進する学生交流の特徴は、エラスムス計画と比較すれば明瞭であるが、「大学連合」に在籍する学生が他の加盟校で勉学することを「日常性において」保証している点に求められる。地理的近接性の故に、国境を越えた他大学での勉学といえども、一般的な意味での留学には該当しない。それゆえ、学生を送り出す側も受け入れる側も、奨学金といった経済的援助をとくに与えることをしない。今回の調査で知り得た限りでは、バーゼル大学が他の「大学連合」加盟校に学ぶ学生のために、若干の「交通費」を援助しているとのことである（同大学ミュンヒ教授からの聞き取り調査）。

また、「大学連合共通証明書」についての言及から理解されるように、学生の受け入れ手続きはきわめて簡略である。講義（セミナー、実習）を担当する教員が受け入れに同意すれば、学生は他大学で開講されている科目を受講することができる。

このことは、「大学連合」における学生交流が—もちろん学生の勉学意欲にも拠っている—、教員に多くを負っていることを示唆する。具体的に言えば、学生が他大学で学ばさい、教官の指導に拠るところが多い。学生を指導する教官が「大学連合」のなかに構築した「人的ネットワーク」の枠組みを利用して、学生に他大学での勉学を勧めるケースが一般的である（バーゼル大学ミュンヒ教授からの聞き取り調査）。これは「大学連合」間の学生交流が活発に行われるか否かが、学生交流プログラムに対する教員の姿勢に大きく左右されることを意味する。学生交流を自らの教育プログラムのなかに積極的に取り込もうとする教員と、学生交流への関心が低い教員との間の「温度差」が歴然と存在するのである（「ライン川上流域ヨーロッパ大学連合」常設事務局長スパルフェル氏からの聞き取り調査）。

## Ⅲ ストラスブール高等バイオテクノロジー専門学校

「ライン川上流域ヨーロッパ大学連合」の活動に言及したさいに触れたように、バーゼル大

学，フライブルク大学，カールスルーエ大学，ルイ・パストゥール大学（ストラスブール）の4大学が共同して高等教育を行っている。ストラスブール・高等バイオテクノロジー専門学校がそれである。そこでは，4大学がカリキュラム作成，講義，実習面で綿密に協力し，フランス，スイス，ドイツ人学生を対象として教育を行い，課程修了者には，上記4大学の学長が署名した，そして国境を越えて有効な免状が交付される。以下，「大学連合」の理念を現状においてもっとも具体的に実現しているこの高等専門学校について述べることにしよう。

## 1 設立の経緯と目的

ストラスブール・バイオテクノロジー高等専門学校は，1982年ルイ・パストゥール大学を構成する一機関として誕生した。1987年，国民教育・研究省によって正式に認可された教育研究機関となり，国家学位である「アンジェニウール学位」（バイオテクノロジー）の交付を認められた。

1988年11月16日，バーゼルでフランス，ドイツ，スイスにまたがるライン川上流域4大学（バーゼル大学，フライブルク大学，カールスルーエ大学，ルイ・パストゥール大学）の学長は，バイオテクノロジーの基礎研究と応用領域での4大学のポテンシャルを踏まえて，バーゼル，フライブルク，カールスルーエの3大学がルイ・パストゥール大学で展開されているバイオテクノロジー教育課程に参加し，共通の教育プログラムのもとで，共同して教育活動を展開することに合意し，協定を結んだ。こうして，ルイ・パストゥール大学の一付属機関であったバイオテクノロジー高等専門学校は，「ライン川上流域大学附属バイオテクノロジー高等専門学校」としての性格を付与されて，新たな歩みを開始することになったのである。

この高等専門学校の目的は明瞭である。それは，バイオテクノロジーの基礎研究と応用研究の領域で，フランス，ドイツ，スイス3カ国の学生を同時に受け入れて教育することにある。

1992年，高等専門学校は，アルザス地域圏，バ・ラン県，ストラスブール市および同都市圏によって建設された新施設（ストラスブール市に隣接するイルキルシュに位置する）に移転した。この新施設の完成によって，1988年11月の協定が計画した1学年40名の学生を受け入れることが可能になった。

1989年から新しい枠組みにもとづいて，ストラスブール・バイオテクノロジー高等専門学校は機能しはじめたが，それは，既存のルイ・パストゥール大学附属高等専門学校を中心にして，その教育にドイツ，スイスの3大学が参加するという形をとって，「多国性」を備えた新たな教育機関として再出発したものである。

## 2 教育上の協力体制

新しい性格を備えることになった教育機関の教育課程，教育課程の運営と組織は，ルイ・パストゥール大学の一構成機関であるストラスブール・バイオテクノロジー高等専門学校の規約に基づいている（1988年11月の協定第1条および第3条）。従って，他の3大学はその教育課程の枠組みの中で協力することになる。同協定の第2条は，それら3大学が協力する事項とし

て、教員の派遣、3大学での講義および演習の実施、教育指導および修了論文指導、3大学で実施される演習（実習）の場の提供の四つを挙げている。

そして、バーゼル大学、フライブルク大学、カールスルーエ大学の学長あるいはその代理人は、ストラスブール・バイオテクノロジー高等専門学校の規定に関してのみ、同校の運営評議会（Conseil d'Administration）の投票権をもつ構成員となり、また、ストラスブール・バイオテクノロジー高等専門学校の教育課程に参画するバーゼル大学、フライブルク大学、カールスルーエ大学の教員は、ストラスブール・バイオテクノロジー高等専門学校教員評議会の構成員となる（同協定第3条）。

### 3 受験資格・選抜方法・学生定員

#### (1) 受験資格

ストラスブール・バイオテクノロジー高等専門学校の入学は選抜試験の結果による。1988年11月の協定第5条は、ストラスブール・バイオテクノロジー高等専門学校への受験資格について規定している。それによれば、フランスの自然科学分野の大学教育第1期課程の修了者ないし同等の技術系大学短期教育課程の修了者、「グランド・ゼコール準備級」修了者に、そしてドイツ、スイスの大学制度における基礎学修課程の修了者に入学資格を与えている。

フランスを例にその具体例をみると、バイオ物理化学系あるいは一部の生物学系の大学一般教育修了学位取得者、「上級技能者免状（Brevet de Technicien Supérieur）」（バイオ化学ないしバイオテクノロジー分野）取得者、「技術短期大学部修了免状（Diplôme Universitaire de Technologie）」（応用生物学）取得者、「グランド・ゼコール準備級」で2年間数学あるいは生物学を学んだ者が受験資格を手に入れることができる。また、2年次への編入も可能であるが、編入試験希望者には「メトリーズ」の学位を有すること、十分なドイツ語実践力を有することが要求される。

#### (2) 選抜方法

入学者の選抜は入学願書の審査と面接によって行われる。上に述べた受験資格をスイスで取得した者はバーゼル大学事務局に、ドイツで取得した者はフライブルク大学かカールスルーエ大学事務局へ、フランスにおいて取得した志願者（「大学連合」を構成する3カ国以外で取得した者も含む）はルイ・パストゥール大学事務局へ、願書を提出しなくてはならない。

願書にはバカロレア（大学入学資格免状）とそれ以後取得した学位ないし免状（成績評価付き）、外国語勉学歴（勉学期間、語学研修への参加など）、職歴・実習経験などが記載される。そして、出願書類として、願書のほかにバカロレアのコピー、高等教育機関での1年次と2年次前期の成績証明書、さらに高等専門学校長宛の志望理由書が要求される。

選抜試験は各大学で実施される。その際、試験の均質性を確保するために、ドイツ、スイスの大学で行われる面接試験に、ストラスブールの教員が参加することとなっている（Règlement Intérieur [de l'École Supérieure de Biotechnologie de Strasbourg]（以下、Règlement Intérieurと略記）、1.Modalités de recrutement des étudiants）。

願書の受付締切は毎年7月1日、1年次入学志願者の面接試験は通常、7月前半の月曜日に、

2年次編入希望者のそれは7月前半の火曜日に行われる。

### (3) 入学定員

1988年11月の協定第6条は学生定員は毎年40名とすると定めている。そして、40名のうち、バーゼル大学、フライブルク大学、カールスルーエ大学が合計20名を選抜し、残り20名をルイ・パストゥール大学が選抜することとしている。

1989年高等専門学校が開校したときには、フランスから17名、ドイツから7名の学生が集ったのみであったが、2000年学期の在籍者は119名を数え、国別構成では、フランスが62名、ドイツが44名、スイスが12名となっている。

## 4 教育内容、試験など

ストラスブール・バイオテクノロジー高等専門学校の教育は、前述した入学資格から理解されるように、フランスの大学教育第1期課程修了者、ドイツ、スイスの基礎学修課程修了者を対象として行われる。修学期間は最低2年—これは2年次編入者に該当する—、通常は3年である。通常3年にわたる教育は、3カ国にまたがる4都市（バーゼル、フライブルク、カールスルーエ、ストラスブール）で実施される。講義、演習などで使用される言語は、フランス語かドイツ語である。

4大学の共通教育プログラムに従って展開される教育は、4大学の特徴を生かして、各大学が分担する形をとって行われる。ルイ・パストゥール大学は、バイオ化学、分子学、バイオフィジック、化学、発生学、バイオ情報学、数学の領域の教育を担う。バーゼル大学は微生物学の分野、カールスルーエ大学は加工化学分野、そしてフライブルク大学は植物分子生物学および生理学分野の教育を担当する。

3年間の教育プログラムを概観してみよう。1年次のプログラムは以下の通りである。生化学150時間（講義および演習、フランス語 [講義、演習での使用言語、以下同じ]）、分子生物学100時間（講義および演習、フランス語）、プロセス工学50時間（講義、ドイツ語）、植物分子生物学26時間（講義、ドイツ語）、微生物学24時間（講義、ドイツ語。これにバーゼル大学での3週間の演習が加わる）、数学・情報科学70時間（講義および演習、フランス語）、バイオフィジック・バイオケミストリー160時間（講義および演習、フランス語）、言語教育110時間（英語50時間、フランス語あるいはドイツ語60時間）。

2年次のプログラムの概略は次のようになっている。生化学・生物学90時間（講義、フランス語）、遺伝子工学・バイオテクノロジー220時間（講義および演習、フランス語）、プロセス工学80時間（講義、ドイツ語）、植物分子生物学24時間（講義、ドイツ語。これにフライブルク大学での6週間の演習が加わる）、微生物学36時間（講義、ドイツ語。これにバーゼル大学での3週間の演習が加わる）、情報科学・モデル化80時間（講義および演習、フランス語）、経済学（講義および演習、フランス語）、言語教育（105時間、うち75時間はドイツ語、30時間は英語）。

3年次になると、講義、演習に割り当てられる時間数に比して、実習が大きな割合を占める

ことになる。講義、演習については、フランス語で行われるバイオテクノロジーの講義、演習が180時間、フランス語で行われる細胞・分子生物学が160時間、カールスルーエ大学で実施されるプロセス工学演習が2週間で、1月からは8ヶ月間の実習が義務づけられる。実習先としては、公立、私立の研究機関が選ばれるのが一般的である。この実習には実習報告書の作成が義務づけられる。

このような3年間にわたる教育を概観したうえで、以下の点をストラスブール・バイオテクノロジー高等専門学校の特徴として指摘することができよう。

まず、4大学の協力の上に立脚して教育が行われるため、学生はストラスブール以外の協力大学所在地で学ぶ点である。3年次前期までに、学生は15週間バーゼル、フライブルク、カールスルーエで教育を受ける。この3都市での滞在費用は3大学が負担し、レイ・パストゥール大学が交通費を負担するのである。

二つ目の特徴は語学教育、とくにフランス語とドイツ語教育が重視されている点である。これら二言語の語学教育の重視は、講義、演習がフランス語とドイツ語の二カ国語で行われることに起因する必然的結果として理解される。講義、実験などに参加するには、フランス語を母国語としない学生にとってはドイツ語の習得が、ドイツ語を母国語としない学生にとってはフランス語の習得が不可欠だからである。また、国際語としての英語にも重きが置かれている。

学年歴では毎年10月から本格的に教育活動が開始されるが、それに先立つ9月中、ドイツ語、フランス語、英語の集中講義が、学生の語学習得レベルに応じたクラス編成を行った上で実施される。10月以降も週2時間の語学教育が確保されている。

教育プログラムの三つ目の特徴は、上述の専門分野での実験実習に多くの時間が割かれていることであり、まるまる20週が実験実習のために費やされる。この時間数は通常の大学教育[第2期]課程修了学位を取得するのに要求される時間数よりもはるかに多い(ストラスブール・バイオテクノロジー高等専門学校のブーランジェ教授)。

また、1年次と2年次の最後に、それぞれ1ヶ月間設けられている訓練期間も特徴の一つとして挙げられる(ブーランジェ教授)。1年次のそれは、7月から8月まで研究所で行われ、研究所で働くための心得を学生に教育することが目的であり、2年次の訓練は6月中旬から7月中旬にかけて行われ、高等専門学校のスタッフの指導のもと、4大学のいずれかで「ミニ研究プロジェクト」を実践することで、研究の実践のイニシエーションを体験させるためである。

## 5 試験、取得学位(免状)

試験は筆記、口述によって実施される。試験問題は学校で使用される3カ国語(フランス語、ドイツ語、英語)のうちの2カ国語で出題され、学生はその2カ国語のなかの1カ国語で解答しなければならない。試験を実施する教員は、試験時間を決定するさい、教員会議の同意を得なくてはならない。母国語で解答できない学生を考慮してのことである。そして、そうした学生には最長30分の試験時間の延長が認められる(Règlement Intérieur 4. Les examens)。

1年次から2年次への進級、2年次から3年次への進級は、履修科目の試験の平均点が10点

(20点満点)であること。ただし、零点の科目がないこと、科目群 (module) のなかで7点以下の科目がないことが条件とされる (Règlement Intérieur, Article 10)。また、落第は1回しか認められない (Règlement Intérieur, Article 8)。

課程修了者には、フランス語、ドイツ語併記の「バイオテクノロジー学位」(Diplome de biotechnologie) が与えられる。正確には、この学位はフランス語ではDiplôme d'Ingénieur en Biotechnologieと、ドイツ語ではDiplom-Biotechnologinと表記されている。フランス高等教育制度では、Diplome d'Ingénieurは、大学教育第2期課程修了学位である「メトリーズ」と同等であり、ドイツ、スイスの高等教育制度では、Diplomは前述の通り、専門学修課程修了証である。

この学位フランス、スイス、ドイツで正式に認められる、「多国性」を有する免状であることに大きな特徴がある。フランス、ドイツ、スイスの国家学位名が同じ学位記に併記されていることがそのことを証明している。すなわち、この免状は、「同価値」であることの認定(équivalence)を得る手続きをとることなく、3カ国において有効なのである。

この学位記はフランス語・ドイツ語で併記されており、そこには、「ライン川上流域ヨーロッパ大学連合協議会」委員長、バーゼル大学、フライブルク大学、カールスルーエ大学、ルイ・バストゥール大学の4大学学長の署名がある。これは、ストラスブール・バイオテクノロジー高等専門学校の教育活動が、「ライン川上流域ヨーロッパ大学連合」の事業であり、3カ国4大学の協力の賜であることを具体的に示しているのである。

## 6 学生の進路

前述のブーランジェ教授によれば、バイオテクノロジーのさまざま分野の実践的訓練を受けることで、同校の卒業生は、産業界の研究・開発ラボラトリーが計画するあらゆるプロジェクトに参加することが期待される。

卒業生の進路からすると、その期待は裏切られていないと思われる。1993年から1997年にかけて卒業した者(すなわち3カ国認可学位である「技師免状」の取得者)128人のうち、70%がライフ・サイエンス系の研究・開発関連職(とくに薬理産業、食品産業など)の道に進み、5%が製造業系、同じく5%が特許関連分野に、また5%が販売業分野に職を得た。それ以外の分野へは9.5%がそれ以外の分野に就職した。職を得られなかった者は5.5%である(ブーランジェ教授提供の資料による)。

ストラスブール・バイオテクノロジー高等専門学校はまた、博士号取得準備コースを備え、希望者の便宜を図っている。このコースは、修学期間1年の「分子・細胞生物学高等研究免状」(Diplôme d'Etudes Supérieures en Biologie Moléculaire et Cellulaire)の取得を目指すコースであり、学生は3年次に進むと登録することができる。この免状は「研究深化免状」(Diplôme Etude Approfondies)ーフランスにおいては博士論文を準備するのに不可欠な免状ーであるから、当該コースを修了すれば、卒業と同時に、博士論文を準備することができる。最近、このコースに登録する学生数が増加している。

## むすび

これまでの叙述をまとめて結びとしたい。

ライン川上流域に位置するストラスブールの3大学、ミュールーズ大学、フライブルク大学、カールスルーエ大学、バーゼル大学は、地理的近接性を生かし、1980年代に国境を越えて文化交流の推進、研究教育の交流・協力の推進、地域問題の解決のための共同作業を行い、最終的には地域間、国家間の結びつきの強化に貢献すべく、協調しあい、1989年に「ライン川上流域ヨーロッパ大学連合」を結成した。

これは、1980年代に再度活発になった「ヨーロッパ統合」の動きに対応するものであり、「大学連合」が導入した学生交流策は、ヨーロッパ共同体が統合の教育領域での施策として取り入れた「エラスムス計画」の目的を先取りするものといえよう。

加盟校間の学生移動・交流の拡大は、「大学連合」の主要な取り組みの一つであるが、そのために、「大学連合」は他大学で学ぶ学生に修学上の便宜を与え、各大学の「教育力」を提供し、他大学での学習成果を在籍大学においても認定する方式を取り入れた。そこで展開される学生移動は、在籍中の大学から他大学に転学するとか、国境を越えた外国の大学に留学することではなく、通常の大学教育のなかで、外国の大学も含む他大学で学ぶことを可能にしている。

教育活動の領域で「ライン川上流域ヨーロッパ大学連合」の目標とするところと加盟校間の協力関係とがもっとも具現されているのは「ストラスブール・バイオテクノロジー高等専門学校」の運営である。運営はルイ・パストゥール大学の一構成機関である同校が中心に運営するにせよ、フライブルク大学、カールスルーエ大学、バーゼル大学の教員がそれに積極的に関与し、フランス、ドイツ、スイスの学生がともに学んでいる。

学位の観点からしても「ストラスブール・バイオテクノロジー高等専門学校」修了者に授与される学位の「多国性」は特筆に値する。「同価値」の認定を経ずして、一枚の修了証がフランス、ドイツ、スイスの国家学位として認められるのである。

現在、ヨーロッパ連合では、学位制度の「統一化」が議論されているが、「ストラスブール・バイオテクノロジー高等専門学校」で行われている学位授与方式は、国境を越えた教育活動が日常化するであろう近い将来、国境を越えた学位制度を見据えたとき、一つの示唆を与えるであろう。

【参考資料・参考文献】

Conférence des Présidents et Recteurs des Universités du Rhin Supérieur, Conventions des universités de Bâle, Fribourg en Breisgau, Karlsruhe et Strasbourg ULP du 16 septembre 1988 concernant la participation au cursus d'études en Biotechnologie de l'Ecole Supérieure de Biotechnologie de Strasbourg

Confédération Européenne des Universités du Rhin Supérieur, Information sur la reconnaissance des périodes d'études et la validation des diplômes (équivalences), octobre 1996

Confédération Européenne des Universités du Rhin Supérieur, En bref, s.d.

Confédération Européenne des Universités du Rhin Supérieur, Convention du 19 octobre 1989 adoptée par la Conférence des Recteurs et Présidents des Universités du Rhin Supérieur, 1989

Ecole Supérieure de Biotechnologie de Starsbourg/Ecole Européenne des Universités du Rhin Supérieur, ESBS Livret des Etudiants, Strasbourg, 2000

Ecole Supérieure de Biotechnologie de Starsbourg, ESBS Le bio-ingénieur européen (brochure)

EUCOR en 1995, en 1996 et 1997:Rapport du Président.

Guide des Bibliothèques de l'Albert Ludwigs Universität et de l'Universität de Bâle pour Etudiants Mulhousiens et Colmariens (brochure)

J.STREITH, La Collaboration Régionale des Univeristés du Rhin Supérieur, in Bulletin Société industrielle de Mulhouse, no.818 (1990), pp.77-86.

Les Universités du Rhin Supérieur de la fin du Moyen Age à nos jours:Actes du Colloque organisé à l'occasion du 450e Anniversaire des Enseignements Supérieurs à Strasbourg, Strasbourg, 1988

Université de Haute Alsace (brochure)

Université Robert Shuman Strasbourg (brochure)

大嶋誠「フランスにおける学位取得と学習成果の認定の多様性について」『学位研究』 第11号 (1999), pp.57-71

短期大学基準協会調査研究委員会『先進5カ国における短期高等教育の現状と動向の調査研究』, 短期大学基準協会, 2000

小野嘉男「ヨーロッパ単位互換 (ECTS-European Credit Transfer System) について」『学位研究』 第12号 (2000), pp.3-28

吉川裕美子「ドイツ高等教育における単位制度導入の動向ー学位制度と学修課程の検討からー」『学位研究』 第11号 (1999), pp.73-89

ラシュドール (横尾社英訳)『大学の起源ーヨーロッパ中世大学史ー』(中) 東洋館出版社 昭和42年

【参考サイト】

<a href="http://www.univ-mulhouse.fr">http://www.univ-mulhouse.fr</a>	(オート・アルザス大学)
<a href="http://www-ulp.u-strasbg.fr">http://www-ulp.u-strasbg.fr</a>	(ルイ・パストゥール大学, ストラスブール)
<a href="http://www-urs.u-strasbg.fr">http://www-urs.u-strasbg.fr</a>	(ロベール・シューマン大学, ストラスブール)
<a href="http://umb.u-strasbg.fr">http://umb.u-strasbg.fr</a>	(人文科学大学, ストラスブール)
<a href="http://www-ruf.uni-freiburg.de">http://www-ruf.uni-freiburg.de</a>	(フライブルク大学)
<a href="http://www.uni-karlsruhe.de">http://www.uni-karlsruhe.de</a>	(カールスルーエ大学)
<a href="http://www.unibas.ch">http://www.unibas.ch</a>	(バーゼル大学)

[ABSTRACT]

European University Confederation of the Ober Rhine : Its Development,  
Mutual Learning Evaluation and Degrees

OSHIMA Makoto\*

This article reviews development, policy of mutual learning evaluation and degree awarding system of the European University Confederation of the Ober Rhine / EUCOR / Confédération Européenne des Universités du Rhin Supérieur / Europäische Konföderation der Oberrheinischen Universitäten : EUCOR, which has been served as a consortium for credit transference between seven universities around upper Rhine region across three countries of France, Germany and Switzerland.

EUCOR was first proposed in 1977 to promote the international mobility and academic exchange in higher education. It was officially established in 1989 under the ideal influence of the European Community with strong advantage of geographical accessibility in that region. Under the scheme of EUCOR, a mobile student from one of other six institutes is able to enjoy the same academic treatment as home students with continuous registration in his / her original university. To put it concretely, a common student identification card which is called EUCOR Student Card : Studiendonausweis : Carte d'étudiant is issued to a mobile student.

In this article, Strasburg Bio-Technology Grand-Ecole that consists Louis Pasteur University is also reviewed as the most visible case of cooperation of four universities in that region. This institute has some character of virtual Grand-Ecole attached to the Upper Rhine University. It provides education and Diploma in three languages of French, German and English to promote the student mobility and guarantee the easy circulation of academic credence.

Though the performance under this confederation may be smaller in comparison with the whole aspiration of ERASMUS Project, it provides some concrete blue prints of larger enterprise and inter institutional credit transfer system.

---

\* Professor, Dean, Faculty of Education and Welfare Science, Oita University